

出エジプト記35章 「進んで献げる者」

1A 安息日の優先 1-4

2A 仕事への主の命令 4-19

1B 奉納物(献金&献品) 4-9

2B 祭具と装束(奉仕) 10-19

3A 民の心の奮い立ち20-35

1B 献げる力 20-29

2B 職人の紹介 30-35

本文

出エジプト記の学びは、35章に入ります。私たちは前回、主がシナイ山にて、モーセに改めて契約を授けてくださったところを見ました。金の子牛事件で、神との契約を台無しにしてしまったイスラエルですが、神は、憐れみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富んでいる方としてモーセに現れ、イスラエルを豊かに赦し、恵みによって再度、主にお仕えする機会をお与えになっているのです。

そして35章においては、幕屋に必要な材料を献げること、そして幕屋の祭具や材料を細工することを主は命じておられます。そこで何度となく出て来る言葉は、「進んで献げる」という言葉です。また、「心動かされた」という言葉も出てきます。

私たちは日曜の礼拝において、ルカ21章、貧しいやもめの献金を通して、主に献げることについて学びましたが、まさにその事です(1-4節)。イスラエルの民は、主によってエジプトから救い出され、主の民となりました。そのようにして、恵みによって救われたゆえに、自分のものはすべて主のものとなっており、自分自身と自分の物をすべて主に明け渡すという応答をします。そして、礼拝対象も変わりました。それまでは神々と呼ばれる偶像であり、あるいは自分自身の欲に仕えていたと言ってもよいでしょう、けれども、今や主こそが、自分の仕える方であり、この方が王であるのだから、主に献げ物をするのはごく当たり前のことです。そして献げた物というのは、具体的には主への礼拝のために使われます。教会においても、私たちが礼拝をするために必要なところに献げ物を使います。家賃がそうでしょう、その他の必要な経費もあります。また専ら奉仕のために時間を費やしている人々の生活を支えるためにも使うことを学びました。そして、その時に大事なのが、「心が動かされ、自ら進んで献げる」ことであるということです。

1A 安息日の優先 1-4

1a モーセはイスラエルの全会衆を集めて、彼らに言った。

イスラエルの一部の者たちだけでなく、全会衆を集めて言っています。彼らは、金の子牛の事件について、心に強い痛みを覚え、自分たちの偶像を取り除いていました。そして、モーセが主と共にシナイの山で語り合っている時、それによって主の輝きがモーセの顔を照り輝かせていることを見ました。あまりにも眩しいので、モーセは語る時に顔に覆いをしました。そうやって、主からの言葉を民は聞き始めていたのです。ここに、民の心が奮い立ち、これから新たに主にお仕えするのだという思いが強く与えられていたことでしょう。

1b「これは、【主】が行えと命じられたことである。2 六日間は仕事をする。しかし、七日目は、あなたがたにとって【主】の聖なる全き安息である。この日に仕事をする者は、だれでも殺されなければならない。3 安息日には、あなたがたの住まいのどこであっても、火をたいてはならない。」

主が、献げ物をし、また祭具や装束を作成することを命じるにあたって、何としてでも守らなければいけないこととして命じておられるのが安息です。たとえ主のための奉仕であっても、それに安息は取って替わるものではありません。主が六日で天地を造られ、七日目に休まれ、その日を聖なるものとされたことを、イスラエルの民には契約の印として守るように命じておられます(31:13-17)。神のかたちに造られた民として、その日を休み、聖なるものとするを命じられています。また、民は、エジプトにおいて労働を使役させられていたところから、解放され、自由にされたことが、救われたことを意味しており、ゆえに、自分のしている仕事を一旦、止めて、そして主を仰ぎ見、礼拝することを守らないといけないのです。

先日、バプテスマを受けたばかりの姉妹が、正直な心の思いを分かち合ってくださいましたが、信仰を持ったら多くの人が抱く疑問がありますね。「イエス様を信じたら、えっ？これから死ぬまで、定期的に礼拝を献げるの？」そうですね、私たちの礼拝と言っても、信仰を持つ前はせいぜい、年に一度の初詣で、お賽銭を投げて、手を叩くことぐらいしかありませんから、そこまでの献身が信じられないのです。けれども、神は私たちを救われるために、ご自分の独り子をも惜しまずに献げられたのですから、その本気度というか、大きな犠牲を覚えるのに、私たちもまた、キリストにあって安息することが必須です。体を一度、止めて、主の前に出る時が必要なのです。

そして、ここの箇所では、「火をたいてはならない」という命令が付け加えられています。仕事といっても、外の労働だけでなく、台所で食事を作ることもしてはならないという命令です。休むことが、それほど優先するということ。思い出すが、マルタが給仕をしていたけれども、マリアがイエス様の足元で御言葉を聞いていたことです。

2A 仕事への主の命令 4-19

1B 奉納物(献金&献品) 4-9

4 モーセはイスラエルの全会衆に告げた。「これは【主】が命じられたことである。5 あなたがたの

中から【主】への奉納物を受け取りなさい。すべて、進んで献げる心のある人に、【主】への奉納物を持って来させなさい。すなわち、金、銀、青銅、6 青、紫、緋色の撚り糸、亜麻布、やぎの毛、7 赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、8 ともしび用の油、注ぎの油と、香り高い香のための香料、9 エポデや胸当てにはめ込む、縞めのをや宝石である。

モーセが再び、全会衆に告げています。そして、「あなたがたの中から【主】への奉納物を受け取りなさい。」と言われて、自分たちの中からの奉納物を強調しています。主への奉仕が、イスラエルの民が一人残らず関わってほしい、いや彼ら自身が関わりたいと願っていることでしょう。これら奉納物を、全ての人は何らかの形で献げます。使徒パウロも、教会が、みながつになっているキリストの体であることを強調しました。「ロマ 12:4-5 一つのからだには多くの器官があり、しかも、すべての器官が同じ働きをしてはいないように、大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、一人ひとり互いに器官なのです。」

そして、「すべて、進んで献げる心のある人」というように、間口を広げて全ての人に、自ら進んで献げることに促しています。教会に対しても、パウロはこう言いました。「Ⅱコリ 9:6-7 私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」強いられてではなく、心で決めた通り、と言っています。これは、一つに集まる前から決めるということがあるでしょう。礼拝において、その時に雰囲気や暗黙の圧力で捧げなければいけないと思ったり、感情に流されて捧げたりするのではなく、礼拝の前から、主に献げる額を心で決めておくのです。

進んで献げる心とはどういうことか、ダビデのへりくだりから出てきた神への祈りを読んできたと思います。ダビデは息子ソロモンのために、将来建てる神殿の材料を、自分自身も、また民の間からも献げるようにさせました。そしてこう祈っています。「Ⅰ歴代 29:10-17 ダビデは全会衆の前で【主】をほめたたえた。ダビデは言った。「私たちの父イスラエルの神、【主】よ。あなたがとこしえからとこしえまで、ほめたたえられますように。11 【主】よ、偉大さ、力、輝き、栄光、威厳は、あなたのものです。天にあるものも地にあるものもすべて。【主】よ、王国もあなたのものです。あなたは、すべてのものの上に、かしらとしてあがめられるべき方です。12 富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものを支配しておられます。あなたの御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてのものが偉大にされ、力づけられるのです。13 私たちの神よ。今、私たちはあなたに感謝し、あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。14 このように自ら進んで献げる力を持っているとしても、私は何者なのでしょう、私の民は何者なのでしょう。すべてはあなたから出たのであり、私たちは御手から出たものをあなたに献げたにすぎません。15 私たちは、父祖たちがみなそうであったように、あなたの前では寄留者であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。16 私たちの神、【主】よ。あなたの聖なる御名

なるでしょう。あるいは、「皿を洗う力、掃除する力があるならば、それを行いなさい」とも言い換えられるでしょう。あるいは、「挨拶することができますか？人々を祝福するために、行いなさい。」とも言えるでしょう。「祈れますか？ならば、教会の人々のために祈るために、時間を分けて、捧げてください。」とも言えるでしょう。

そしてもう一つ大事なものは、「【主】が命じられたものを」ということです。主に与えられた力ですが、それを自分の願うように使うのではなく、主に命じられたように使うのです。主に献げる者の特徴、大前提は、主ご自身に仕えるのであって、自分のしたいこと、できることを実現させることではない、ということです。例えば音楽の例を出しましたが、礼拝において自分の音楽の才能を披露する必要はないのです。いや、してはいけません。主に仕えるのであって、自分の能力を発揮するところではないのです。それでは、主に仕えるのではなく、自分自身に仕えてしまうことになります。

3A 民の心の奮い立ち20-35

1B 献げる力 20-29

20 イスラエルの全会衆はモーゼの前から立ち去った。21 心を動かされた者、霊に促しを受けた者はみな、会見の天幕の仕事のため、そのあらゆる奉仕のため、また聖なる装束のために、【主】への奉納物を持って来た。22 進んで献げる心のある者はみな、男も女も、飾り輪、耳輪、指輪、首飾り、すべての金の飾り物を持って来た。金の奉納物を【主】に献げる者はみな、そのようにした。23 また、青、紫、緋色の燃り糸、亜麻布、やぎの毛、赤くなめした雄羊の皮、じゅごんの皮を持っている者はみな、それを持って来た。24 銀や青銅の奉納物を献げる者はみな、それを【主】への奉納物として持って来た。アカシヤ材を持っている者はみな、奉仕のあらゆる仕事のためにそれを持って来た。

イスラエルの全会衆の心が動いています。「心を動かされた者、霊に促しを受けた者」と言っていますね、言い換えると、主に献げ物をする人々が多くなっている時、それは御霊が人々の間で働いている時、と言えるかもしれません。主のなされようとしていることに、自分も献げることによって、その恵みにあずかりたいと願っているのです。パウロはマケドニアの教会の、貧しい人々が熱心に、エルサレムの兄弟姉妹のために献金をしようとしている姿をこう描いています。「Ⅱコリ 8:2-4 彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。私は証します。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。」ここでの「恵みにあずかる」とは、「恵みの交わりをする」とも訳することができます。神の恵みに自分もその一部になりたいと願って、それで力に応じた、いやそれ以上の献げ物をしたということです。後で、このイスラエル人たちも、有り余る奉仕だとして、献げることをモーゼが制して、やめさせるほど捧げている様子を、次の章で見ます。

興味深いのは、男だけでなく、女も、と書かれている所です。というのは、女は飾り物など、金で出来たものを持っているからです。女も率先して、夫に何か言われてというのではなく、自分のものを献げる心を持っていて、それが主の前で認められているのです。聖書の描く女性は、男尊女卑のそれではありません。女が主に献げる姿は、イエス様の十字架の死を最後に見たのが女たちで、甦りの最初の目撃者たちも女たちであることから、明らかです。

25 また、心に知恵ある女もみな、自分の手で紡ぎ、その紡いだ青、紫、緋色の撚り糸、それに亜麻布を持って来た。26 心を動かされ、知恵を用いたいと思った女たちはみな、やぎの毛を紡いだ。

女であれば、糸をつむぐことができる人たちが多くははずです。トルコで絨毯の制作を見たことがあります。蚕の糸から絨毯に紡ぐまでは、相当の手間と知恵が必要です。そういったことを、女たちは紡ぎ方を知っている女たちは、その作業をしてから主の前に持ってきました。

27 部族の長たちは、エポデと胸当てにはめ込む、縞めのうや宝石を持って来た。28 また、ともしび、注ぎの油のため、また香りの高い香のために、香料と油を持って来た。

部族の長たちは、他の民衆の持っていない貴金属を持っていました、縞めのうや宝石です。また、高価な香油も持って来ました。そういった貴重な物を持っている長たちも、彼らの力で献げました。

このように、財産のある人がその力に応じて献げることも必要ですね。例えば、聞くドラマ聖書のアプリは、投資グループのクリスチャンによる財団によって行われております。おそらく、膨大なお金が動いていると思われそうですが、そうやって主に与えられている力に応じて献げ物をしてられるのです。

29 イスラエルの子らは男も女もみな、【主】がモーセを通して行うように命じられたすべての仕事のために、心から進んで献げたのであり、それを進んで献げるものとして【主】に持って来た。

こうやって繰り返していますね、「心から進んで献げた」そして「進んで献げる」であります。

2B 職人の紹介 30-35

30 モーセはイスラエルの子らに言った。「見よ。【主】は、ユダ部族の、フルの子ウリの子ベツアルエルを名指して召し、31 彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。32 それは、彼が金や銀や青銅の細工に意匠を凝らし、33 はめ込みの宝石を彫刻し、木を彫刻し、意匠を凝らす仕事をするためである。34 また、彼の心に人を教える力をお与えになった。彼と、ダン部族のアヒサマクの子オホリアブに、そのようにされた。35 主は彼らをすぐれた知恵で満たされた。それは彼らが、あらゆる仕事と巧みな設計をなす者として、彫刻する者、設計する者、青、

紫、緋色の撚り糸と亜麻布で刺繍する者、また機織りをする者の仕事を成し遂げるためである。

幕屋において、細工に意匠を凝らす作業、宝石や木の彫刻、意匠を凝らす仕事が必要です。そこで職人業が必要なのですが、主が、ベツアルエルを名指しで召しました。それから、オホリアブも召し出し他の人々を教える力も与えられています。彼らの指導によって、これらの職人技が必要な部分を成し遂げていくこととなります。36章から39章までに、その作業の具体的な奉仕を見ていくこととなります。

彼らの奉仕について、私たちは多くを学ぶことができます。それは、第一に、「名指しで召した」ということです。主が召したということが、強調されています。主に仕える働きをする時に、自分の願望ではなく、主がこのようにしなさいと命じられたから、私はここにいますという、召命観が絶対に必要です。主に仕えるのですから、主の召使になっているのであり、誰に呼ばれ、誰に命じられ、誰に仕えているのかが明確になっていることが絶対に必要です。それが無い人が行くと、悲惨です。すぐに思い出すのは、王サウルです。彼は人には選ばれましたが、神の選びと召しがほとんどなかったため、自分の願いによってイスラエルの民を支配していき、ダビデを妬み、彼を殺そうとしていった悲惨な結果となりました。

次に、「神の霊を満たされた」とあります。また、「すぐれた知恵で満たされた」とあります。神から与えられた力のみならず、それ以上に、上からの御霊の満たしが必要でした。使徒たちが、聖霊に満たされる前とその後、ビフォア・アフターがあまりにも違うことを思い出してください。女中に指摘されて、主を否んだペテロでしたが、同じ大祭司や他の議員たちの前で、大胆に、イエス以外に救い主はいないと宣言しましたが、「聖霊に満たされて」という言葉がありました。聖霊が上から臨まれると、力を受けます。また、知恵については、主ご自身がイザヤ書 11章によると、知恵の御霊に満たされたことが書かれており、神が満ちておられること、支配しておられることが、如実に分かります。

そして、自分ができるだけでなく、他の人たちに教える力も必要です。つまり、リーダーシップの能力です。パウロがテモテに対して、「Ⅱテモ 2:2 多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。」と言いました。自分ができるだけでなく、他の人々に教えるというところにも、賜物が必要だと言うことです。そのようにして、主の働きを成し遂げることができます。

こうやって、進んで行く奉仕、心動かされた人々による献げ物を見ることができました。教会というのも、同じようにして捧げる集団であることを知り、主の御霊が私たちをいつまでも満たして下さることを祈っています。